



Nakayama International Center for Medical Cooperation
OSAKA MEDICAL COLLEGE

中山国際医学医療交流センターの航跡
1998-2022

大阪医科大学 中山国際医学医療交流センター

中山国際医学医療
交流センターの航跡



Nakayama International Center for Medical Cooperation
OSAKA MEDICAL COLLEGE

協定校・協定機関一覧



CONTENTS

グローバル医療人の育成を目指して 04

【第1章】 閉設記念誌発行によせて

学長ご挨拶 10

センター長ご挨拶 12

学部長ご挨拶 13

歴代センター長ご挨拶 15

協定校からのメッセージ 19

【第2章】 沿革／中山国際医学医療交流センターの歩み

沿革 32

中山国際医学医療交流センターの歩み 33

【第3章】 交流の集積

交流の集積 36

編集後記 44



グローバル医療人の 育成を目指して







【第1章】

Chapter-1

大阪医科大学 中山国際医学医療交流センター

閉設記念誌発行によせて



中山国際医学医療交流センターの発展



大阪医科薬科大学 学長
同 国際交流機構長 佐野浩一

令和3年4月1日、大阪医科大学と大阪薬科大学が統合され、大阪医科薬科大学となりました。設置者である学校法人大阪医科薬科大学の目的は、「教育基本法及び学校教育法並びに私立学校法に従い、学校等を設置し、国際的視野に立った教育、研究或いは良質な医療の実践をとおして、創造性と人間性豊かで人類の福祉と文化の発展に貢献する人材を育成すること」です。大阪医科大学の前身である大阪高等医学専門学校の設立者吉津度先生は、都会への集中による医師偏在が国家的問題となっていた当時、いかなる場所においても医療を提供することができる医師の育成を目指し、通常の医師養成課程よりも1年長い五年

制の課程を設定しました。この課程の中は、英語・ドイツ語に加えて、中国語・マレー語・スペイン語・ポルトガル語・インド語の科目を提供するなど、国際的視野の醸成に努めていました。

そのような課程を経て医師となった中山太郎博士は、国会議員であつたご尊父中山福蔵先生と同じく、また日本初の女性閣僚(元厚生大臣)であつたご母堂中山マサ先生の志を継ぎ、国会議員となられ外務大臣を務められました。中山太郎博士は、国政に携わられると同時に、常に母校愛をもって、後進の育成にも心を砕かれ、学校法人の評議員・理事・顧問を務めてくださいました。その中で、母校の後進が国際交流を通して国際的視野、すなわち幅広い教養と柔軟な思考を備えた医師となる機会を提供するために、国際交流センターを設置するご提案を頂きましたことから、提案者である中山太郎博士を顕彰すべくセンターの名称を「中山国際医学医療交流センター」と命名したのでした。

今般、大学統合によって成った大阪医科薬科大学では両大学の歴史と伝統や各学部の特徴を活かすためにそれぞれの国際交流委員会を緩やかに包括する国際交流機構を形成したことにとりま

い、「中山国際医学医療交流センター」を発展的に解消することになりました。国際交流機構の設置に際して、中山太郎博士を顕彰するため、国際交流機構規程の第2条に「機構は、旧大阪医科大学同窓の元外務大臣中山太郎先生によって設置された中山国際医学医療交流センターを基とするもので、本学が医療系総合大学として各学部の特徴を踏まえた国際基準の医療人を育成するための支援を行う。」という条文を置いております。

新型コロナウイルス感染症の流行によって2020年初頭より対面での国際交流が難しくなり、on lineでの交流が主体でありましたが、新型コロナウイルス感染症への対応の経験を積んで、いよいよ対面での国際交流を再開する時期を迎えました。しかしながら、昨今の不安定な国際情勢に鑑み、国際交流にもより一層のリスクマネジメントが急がれています。そこで、学生や教員が安心して国際交流を果たすため、機構に代えて積極的に各学部の国際交流委員会に働きかけることができるセンターを設置することになりました。そのセンターは、大阪医科大学でも、大阪薬科大学でもない、大阪医科薬科大学の組織として「国際交流センター(Global Center)」と命名いたしましたが、国際交流機構規程と同様に国際交流センター規程第2条に先の中山太郎博士を顕彰する条文を掲げています。

極めて不安定な国際情勢がしばらく続くものと思われます。新生大阪医科薬科大学国際交流センターが将来様々な国際的課題を解決するであろう学生や教員のより深い国際的視野を醸成する場を提供することを祈念しております。



会談に臨む中山センター会長

中山国際医学医療交流センターの発展的解消に寄せて



中山国際医学医療交流センターセンター長
玉置淳子

これまで、中山国際医学医療交流センターは、海外の機関と様々な交流を深めてきました。その範囲は、大学・病院等における学生交流、手術技術交流、学術交流や、国際交流シンポジウムの開催と多岐にわたり、2021年現在には、8ヶ国の計15ヵ所の大学及び医療機関と協定を結ぶ成果をあげました。2017年からは、本学学生のための「海外安全ハンドブック」を作成し情報提供とより質の高い危機管理の実現を推進し、本学における国際交流の危機管理の推進の方策の基盤の一つとなったと考えています。また、特筆すべきことの一つに、2019年4月25日に国立台湾大学医学部と単位互換協定を締結したことが挙げられます。医学部臨床実習における単位互換協定締結は、双方医学部の教育改革につなげ、臨床実習を円滑かつ効果的に行うことを目的として位置付けられています。単位互換協定を締結できた背景には、これまでのセンターの着実な活動によって基盤体制を整えてきたことが要因の一つであると考えます。

COVID-19のパンデミックは、グローバルな視点で医学・医療の課題を捉える重要性をもたらしたと考えます。今後更なる本学の国際交流の推進と発展を祈念しております。

大阪医科大学 中山国際医学医療交流センターの閉設に寄せて



大阪医科薬科大学 医学部長 内山和久

中山国際医学医療交流センターは、大阪医科大学の建学の精神の柱の一つである国際貢献を基に、医学医療の学術交流、振興に寄与することを目的に、大阪医科大学の卒業生である中山太郎元衆議院議員(元外務大臣)を会長として、平成10年1月に設立されました。

設立当初は、海外医療者の本学での短期研修や見学が主でしたが、2003年に初めての海外からの学生受入れ、2005年の学生派遣を皮切りに、交流協定校を中心に医学部生の臨床実習(クリニカル・クラークシップ)での学生交流を行ってきました。留学生受入れは、学生の希望に基づいて各診療科に配属し、4週間～6週間を本学病院で臨床見学実習を本学学生と共に行いました。これまで、アジア、欧米から

160名あまりの留学生を受け入れてきました。このように多くの留学生を受け入れることができたのも、偏に各診療科の先生方の医学部国際交流への深い理解とお力添えによるものと深く感謝申し上げます。また、本学の医学部生も6年生の「選択臨床実習(海外)」での4週間の臨床見学実習や短期ワークショップ、国際クイズ大会等様々なプログラムに積極的に参加し、300名あまりが中山国際医学医療交流センターを通じて、国際交流を深めて参りました。これらは交流校の開拓、受入れ、派遣プログラムの構築や手続きを担ってこられた中山国際医学医療交流センターの教員、事務の方々の多大なる尽力によるものです。医学部生が在学中に海外で医学を学ぶことや、留学生を迎えて共に学ぶことのメリットは、単なる語学におけるCommunication Skillの向上のみではなく、海外の医療現場を体験することによって、グローバルな視点を持った医師育成を目指すことにあります。

2021年4月の大阪医科大学と大阪薬科大学との統合により、本学は医療系総合大学として新しいスタートを切りました。グローバル化や多様性が進む現代において、医学、薬学、看護学とそれぞれ専門性の高い医学医療分野が力を合わせ、1人の人間の生、生活を支えていくには、国際交流は今後益々不可欠になります。在学中に異文化交流を持った経験は、次世代を担う医師達にとっては、高度の知的表現が要求される医療現場において大変貴重な糧となるものです。

最後に、医療系総合大学のメリットを生かし、多職種連携で病める人の生きる場に臨み、寄り添える本学の医療人育成教育において、長年国際化を牽引してこられた歴代センター長、教職員の皆さまに深く感謝申し上げます。

中山国際医学医療交流センター閉設に寄せて



大阪医科薬科大学 看護学部長 赤澤千春

中山国際医学医療交流センター（以後中山センター）は医学部のロシアをはじめとする海外の大学との交流に端を発する事業の管轄を行うセンターでした。2010年に看護学部が開設され、看護学部も医学部が国際交流を行っている台湾にある台北医学大学の護理学院（看護学部）と提携することができ、学生交流を続けています。この学生交流は日本から毎年3月に3名が台北医学大学を訪問し、6、7月ごろに台北医学大学から本学看護学部に来校しています。

この交流が始まった当時、事務的な仲立ちをしてくれたのが中山センターでした。看護学では初めての台北医学大学との交流が、実り

多きものになるように、国際交流委員会を立ち上げ、委員会が中心となって学部全体が関わるができるプログラムを作成いたしました。

この受け入れプログラムを見て、台北医学大学護理学院から本学を希望する学生は毎年10名ぐらいとなり、満足度の高い評価をいただいています。また、4年前からアメリカ合衆国ミネソタ州にあるミネソタ州立大学マンケート校と提携することができ、学生交流を始めるところです。今後はさらに提携校を増やし、グローバルな視野を持つ学生の育成にも努めていきます。

中山センターが国際交流センターとしてさらにグレードアップする今、学部生だけでなく看護職や理学療法士など医療職に関係する職種のプログラムを整え、本学の特徴としている多職種連携のグローバル版として広く公開して、多くの国々に興味を持ってもらえればと思います。今後は広い視野に立って、国際交流センターがより発展できますよう祈念いたします。

中山国際医学医療交流センターを思う

2021年4月に大阪医科大学が大阪薬科大学と統合され大きく発展されますと共に、その国際交流の場として新たに国際交流センターが開設されました。それに伴い、これまで大阪医科大学に設置されておりました中山国際医学医療交流センターもその役割を終えることとなりました。発展的解消とはいえ一抹のさびしさを感じずる次第です。

当センターは平成10年1月16日、大阪医科大学の立場を踏まえて医学医療の国際交流の推進に寄与するために設置されました。国際的な視野を持つ医療人の育成ということでありました。

名称に中山の名が冠されましたのは、当時国際医療協力で活躍されて居られた本学出身の中山太郎先生（元法人顧問、元外務大臣）のご提唱、ご支援が欠かせないものであったことによります。

当センターの最初の仕事はグルジアの国立トビリシ医科大学からの4名の教員の受入れに始まりました。当時はまだ未熟なものでしたが、とにもかくにもスタートを成功させることに力を注ぎました。その後は諸代センター長を始め多くの関係者の御努力により、諸外国の大学、病院などと多方面での国際交流が行われ、大きな成果をあげて現在に至っております。

当センターは発展的に解消されるということですので、これまで大阪医科大学の立場を踏まえて得られました成果を新しい国際交流センターの中に活かして頂ければと願っております。



初代センター長
大阪医科薬科大学名誉教授
大澤伸昭

大阪医科大学中山国際医学医療交流センターに寄せて

私は大澤教授の後任として平成11年にセンター長を拝命いたしました。身に余る重責でしたが、以前から医療情報学の研究者として元外務大臣の中山太郎先生にずいぶん引き立てていただいて、主にロシアとの医学医療交流に関わらせていただいていたからだと思います。2代目センター長ではありますが、国際医学医療交流センターとしてはまだ発足まもなく、手探り状態が続いていて、どうすれば良いかと日々悩む毎日でした。私はその後東京大学に転出のためセンター長を退任いたしました。幸いその後の歴代センター長の御指導で、順調に発展していったと聞いております。当時はロシアとの医学医療交流が主体でした。当時のロシアはソビエト連邦解体からの移行期で、たいへん経済的に苦しい状況でした。アムール医科アカデミーと交流があったのですが、学生実習用の顕微鏡やスライドグラスさえ不十分な状態でした。ただ意気は軒昂で、私も一度大学を訪れたのですが、教授陣とウォッカを飲みながら徹夜で語り明かしたのを覚えています。当時は気持ちだけでもっている状況で、それだけにさわやかな交流が出来ていたと思います。大阪医大（当時）の学生も短期間訪問していました。法的な制約が弱かったので、かなり踏み込んだ医療実習を経験することもあったようです。大阪医科薬科大学の国際交流がますます発展することをお祈りいたします。



一般財団法人医療情報システム
開発センター理事長・
自治医科大学客員教授 山本隆一

中山国際医学医療交流センターの活動を振り返って

中山国際医学医療交流センターは1998年1月に、本学出身で元外務大臣中山太郎先生のご紹介のもとロシアのアムール医科アカデミーとの交流をきっかけに誕生しました。

私が2000年6月にセンター長を拝命して早速、学生実習を中心とした協定の締結のための活動を開始しました。2002年9月、センターの運営委員でもあった口腔外科の島原教授とともにハバロフスクからシベリア鉄道で24時間近くかけて調印式に臨み、市長・学長をはじめとして大変な歓迎を受けたことを今でも鮮明に覚えています。

またその間センターが受託したJICAプロジェクトの一つにインド・タミル・ナドゥ州でのフッ素汚染低減対策事業への協力がありました。2週間に及ぶ現地視察の帰路にかねてより申し込みがあった、タイでもトップ医学校の王立マヒドン大学医学部シリラート病院を訪問したことも思い出として強く残っています。

私がセンター長就任から目標としたことはまず近隣の諸外国の医学教育を本学学生につぶさに体験してもらうことでした。

カウンターパートでの2週間から1ヶ月に及ぶ学生の病院実習を受け入れていただいた本学教授をはじめ関連施設の諸先生に改めて御礼申し上げます。



大阪医科薬科大学 名誉教授
河野公一

「早朝医学英語勉強塾」の思い出

私は、2012年9月から2016年3月の定年退職時まで、センター長を務めさせていただいた。私が着任した時は、前任の河野公一先生のご尽力で、すでに多くの国の大学と提携しており、活発な医学生との交流が行われていた。そのような環境に恵まれ、本学の学生には、海外の医学生との交流に積極的に参加する風土があった。私はセンター長として、国際交流に積極的な学生の力に少しでもなりたいと考え、「早朝医学英語勉強塾」と称して、月曜日の午前7時15分から約1時間、医学英語に親しみたいという学生と一緒に、センターの部屋で勉強会を始めた。題材は、New England Journal of MedicineのClinical Problem Solvingで紹介されている症例検討である。早朝にもかかわらず多くの学生が参加してくれ、楽しい時間を過ごすことができた。参加した学生にとって、医学英語の上達にどれほど役だったか定かではないが、私自身は勉強会を通じて、目を輝かせて集まってくる多くの向上心あふれる学生たちと知り合えたことが、今でも大切な財産である。国際交流に積極的にチャレンジするという本学伝統の風土・文化が、大阪医科薬科大学となってさらに発展することを祈念しています。



大阪医科薬科大学 名誉教授
花房俊昭

大阪医科大学中山国際医学医療交流センターへの思い

中山国際医学医療交流センターの記念誌に寄稿させていただき、大変光栄に存じます。中山国際医学医療交流センターは平成10年に開設され、私は運営委員会の委員として運営に携わってまいりました。この度大阪医科大学と大阪薬科大学の統合に合わせて新たに国際交流センターが設置され、全学部の国際交流をさらに発展されるとのこと、大きい期待を込めてうれしく思っております。ただ中山センターとして親しまれた組織がなくなるのは、一抹の寂しさも感じます。私は2016年第1内科学教授花房俊昭先生からセンター長を引き継ぎ、口腔外科学教授植野高章先生にバトンタッチするまで、センター長として海外連携校の教員や学生と密に交流するという貴重な経験をさせていただきました。本学の学生諸君や教員の高い国際感覚にも驚かされました。国際交流事業は、学生や若手教員の成長のために貴重かつ重要な機会を提供してくれます。このような中山国際医学医療交流センターの功績に深く感謝するとともに、新たな国際交流センターの今後の発展をお祈りいたしております。



特定医療法人大阪精神医学研究所 理事長
大阪医科薬科大学 名誉教授
米田博

中山国際医学医療交流センター長をふりかえって

私が中山国際医学医療交流センター長を拝命したのは2018年4月です。当時の大学名は大阪医科大学(英名Osaka Medical College)で新型コロナウイルス感染症による行動制限などもなく協定校と活発な国際交流ができていました。海外で学ぶことを希望する本学学生、本学に学びにくる海外からの学生の熱意に触れることができ、とても楽しく仕事をすることができました。当時の委員の先生方、スタッフに感謝しています。

センター長としていくつかの協定校訪問をしました。メールのやりとりだけでは先方との心のこもった交流はできないだろうとの思いからです。ハワイ大学には学生PBLに参加しました。タイのマヒドン大学では招待講演を行いシリントン王女から直接に感謝状をいただくという貴重な体験をしました。シンガポール国立大学にも訪問し、それがきっかけとなり今でも二国間共同研究をしています。国立台湾大学には台湾での学会の合間に訪問させていただきました。後に国立台湾大学とは単位互換協定を結ぶことができたのもこの訪問がきっかけであったと思います。思い出の詰まった中山国際医学医療交流センターから国際交流機構が開設されました。医療系総合大学としての国際交流の拠点となり新たな扉が開かれることに心より期待いたします。



大阪医科薬科大学
医学部口腔外科学教室 教授
植野高章

中山国際医学医療交流センター閉設に寄せて

私が中山国際医学医療交流センター(中山センター)に関わらせていただくようになったのは2017(平成29)年4月からです。当時より多忙なカリキュラムにもかかわらず積極的に海外で医療を学ぼうという医学部生が少なからずいたことは印象的でした。さらに医療系大学らしいカリキュラムを展開させたいとの思いから、ワーキンググループをつくって、2020年度に国立台湾大学との単位互換プログラムを実現できたことはよい思い出です。現在は医学部カリキュラムとの整合性が取れなくなり、自校で単位を認定する制度に戻ったことは残念ですが、学生さんからすれば、さほど違いはないのかもしれません。そして海外で真剣に医学・医療を学んでほしいという私達のメッセージも変わっていません。医学教育における国際交流は、人の多様性を尊重することを通して、万人の健康を願い、世界が平和に繁栄していくために最も効果的な方策であろうと信じます。この度、本学学生の国際感覚醸成に貢献してきた中山センターは閉設となりますが、これからも中山太郎先生の御意志をそのままに、組織の名称がどう変わろうとも、国際的医療人の養成を一層発展させてまいります。



大阪医科薬科大学
医学部解剖学教室 教授
近藤洋一

アムール医科アカデミー

The cooperation of scientists from the Amur State Medical Academy (ASMA) with Japanese colleagues became possible thanks to the establishment of the Japan-Russia Foundation for Medical Exchanges by the former Minister of Foreign Affairs of Japan, Mr. Taro Nakayama. In 1993 ASMA delegation participated in the 1st Japanese-Russian International Medical Exchange Symposium. The 8th symposium "Amur-2000" was held in Blagoveshchensk. In August 2002 the first delegation of three students and teacher from Osaka Medical College (OMC) visited us, and in the fall two OMC professors Koichi Kono and Masashi Shimahara, were invited to the celebrations in honor of the 50th anniversary of ASMA. An Agreement of Academic and Educational Exchange was concluded between the universities. More than 60 students of ASMA and OMC took part in summer courses organized for them in Osaka and Blagoveshchensk. Visiting Japan, getting acquainted with the advanced achievements in the field of medicine, the beauty of Osaka, Kyoto, Nara, Kobe, the highest culture of the Japanese people made an indelible impression on our students. OMC students got the opportunity to examine patients, attend surgical operations and the delivery room. They found true friends in Russia, fell in love with Russian nature and hospitality. Students from Osaka Medical and Pharmaceutical University take part in student scientific conferences held at ASMA. In 2006 a cardiac surgeon, an anesthesiologist and a nurse from the ASMA Cardiac Surgery Clinic completed an internship in Osaka to master the latest achievements in the field of cardiac surgery. Three professors of ASMA were awarded diplomas of honorary professors of OMC, and three OMC professors were awarded diplomas of honorary professors of ASMA. I express the hope that our cooperation will continue.



Rector of ASMA, Professor
Tatyana Zabolotskikh

ハワイ大学

The Office of Medical Education (OME) at The University of Hawaii John A. Burns School of Medicine (JABSOM) had collaborated with Nakayama International Center for Medical Cooperation (NICMC) for over 15 years before the COVID-19 pandemic halted international travel between our institutions. Each year during their summer elective, four second-year JABSOM students traveled to Osaka Medical College (OMC) with the support of NICMC, to spend two weeks shadowing physicians from different departments, learning about the healthcare systems of Japan, and creating lifelong friendships with OMC students. This experience was the highlight of these students' second year of medical school.

OME has also hosted over 100 (OMC) students during our Summer Medical Education Institute and Learning Clinical Reasoning international workshops. It has been a pleasure meeting these students over the years.

The Office of Global Health and International Medicine (OGHIM) has hosted 10 students from OMC since 2009 and sent one JABSOM student to OMC in 2020. Visiting OMC students participate in a four-week observational Medicine rotation at Kuakini Medical Center. The students attend daily clinical rounds, participate in educational activities and shadow a physician in his office and during hospital rounds.

OMC is one of the first HMEP (Hawaii Medical Education Program) schools, which joined the HMEP project in 2016. JABSOM and the JrSr Corporation have been working with OMC through the NICMC - providing American style medical education to OMC. Every year more than 15 students have been participating in HMEP online e-learning via the HMEP Open Class (30 times per year). These students participate in US style clinical clerkships provided by JABSOM and the JrSr Corporation.

With the merger of OMC and Osaka University of Pharmaceutical Sciences, even after closure of NICMC, JABSOM would like to continue international medical education collaborations and international exchanges with Osaka Medical and Pharmaceutical University through activities of the JABSOM Offices of Medical Education, Global Health and International Medicine and the HMEP project. We would like to thank Nakayama International Center for Medical Corporation for many successful collaborations and their support throughout the years.

Dean of the John A. Burns School of Medicine
Jerris Hedges, MD, MS, MMM



中国医科大学

大阪医科薬科大学中山国際医学医療交流中心:

值此万物复苏，春意盎然之际，祝大阪医科薬科大学发展蒸蒸日上，再创辉煌。

我校与贵校的合作始于2008年，在贵中心的大力协助下，依托临床实习交流项目，两校的交换生达17人次，河野公一、岛原政司、臼田寛等教授多次来访，在人才培养及科学研究方面开展了丰富的国际交流活动。

听闻随着大阪医科薬科大学的成立，中山国際医学医療交流中心完成了历史使命，即将光荣谢幕。暂别老友，有不舍和遗憾，但我相信，两校的友谊之树必将以此为契机茁壮成长，生发出新鲜的枝芽，并结出累累硕果。

最后，我谨代表中国医科大学向贵中心多年的工作表示感谢，祝各位老师身体健康、工作顺利！

中国医科大学校长

聞徳亮

2008年、両学の協力関係が正式に結ばれ、大阪医科薬科大学中山国際医学医療交流センターの多大なご尽力の元、臨床実習交流プロジェクトを通じて、17人もの学生が交換され、河野公一先生をはじめ、島原政司先生や臼田寛先生など、多くの先生が訪問にいらっしゃって、人材育成及び科学研究の分野において、幅広い交流活動を実施してまいりました。中国医科大学を代表し、長年第一線で活躍された中山国際医学医療交流センターの皆様心から祝福し、ご挨拶とさせていただきます。

中国医科大学学長 聞徳亮



マヒドン大学 シリラート病院

On behalf of the Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University, we are honored that our Faculty has been considered one of the Osaka Medical College' s partner institutions. Partners are similar to friends; they support each other to achieve success and goals. On the other hand, they stand by, help each other in hard times, and get through difficulties together.

It has been more than a decade since the mutual cooperation between the Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University, and Osaka Medical College. Dated back on March 5th, 2009, the two institutes agreed to make the MoU for promoting cooperation in education and academic research. Thanks to the MoU, various activities have been continuously encouraged including students and staffs exchange activities, joint research activities, support of lectures, research workshops, and symposiums, and so on. Our students and staffs have learned a lot from your exquisite knowledge and experiences and also the Japanese spirit which is unmatched in terms of discipline, determination, and perseverance. We optimize the knowledge and experience through those activities to become a better institution today and we are always grateful for that. On a long journey ahead, we are walking with confidence and happiness because we have you as our friends walking alongside us towards the great success, no matter how the world will change.

Upon the occasion of the merging of Osaka Medical College and Osaka University of Pharmaceutical Sciences, we would like to express our sincere congratulations and wish you great successes and accomplishments. We firmly believe that this will bring about more facilitation, agility, and prosperity to the new organization.

Best regards,



Prof. Prasit Watanapa, FRCS, FACA, Ph.D.
Dean, Faculty of Medicine Siriraj Hospital
Mahidol University
Bangkok, Thailand



カトリック大学校

First, we would like to sincerely congratulate Osaka Medical and Pharmaceutical University' s new establishment of International Exchange. Osaka Medical and Pharmaceutical University is a prestigious medical school in Japan widely recognized in Korea as well. Osaka Medical and Pharmaceutical University' s excellency in doctoral training programs, preeminence in research, and medical specialization in various fields earned its name as a well-respected medical school in Asia.

We would also like to express gratitude for the active exchange program between Catholic University of Korea and Osaka Medical and Pharmaceutical University. Throughout the last decade, the two institutions continuously worked for effective exchange program opportunities, and now that Osaka Medical and Pharmaceutical University's new international exchange organization is commencing, we hope that this partnership will further develop in the future.

We patiently wait for the day when the exchanges between the two universities will become active again after overcoming this difficult COVID-19 situation.

Thank you.

Yeun Jun Chung, Dean,
Catholic University of Korea



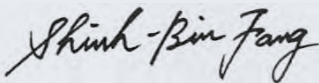
台北医学大学

The College of Medicine, Taipei Medical University and Osaka Medical and Pharmaceutical University have become MOU universities since 2014. During this period, we mutually exchanged at least ten of our medical students for outbound electives that broadened their horizon in medical learning.

Unfortunately, COVID-19 pandemic hindered our student change for a while. I personally met with Dr. Megumi Kondo-Arita in the SNU Medicine Exchange Partner Day on January 20, 2020 and learned a lot from Osaka Medical and Pharmaceutical University in the international medical education. On next year, TMU hold an international webinar for medical education during COVID-19 (<https://sites.google.com/tmu.edu.tw/2021webinarformedicaleducation/schedule?pli=1>) in East Asia on November 24, 2021. We heartily appreciate the sharing of OMPU experience from Professor Takashi Nakano, Chair of the Department of Microbiology and Infection Control, and Director of the Medical Education Center. In this webinar, we fully exchanged our experiences in the evolution and innovation of medical education during the COVID-19 pandemic.

As an international friend of OMPU, we are pleased to know the merge of Osaka Medical College and Osaka University of Pharmaceutical Sciences on April 1, 2021, as well as the coming new Global Center overseeing three independent International Exchange Committees in medicine, pharmacy, and nursing faculty. Such a new organization in your prestigious institution shows a remarkable growth for embracing a new era. We believe that the medical education in the post COVID-19 era will be full of new creations. Not only in student exchange, we also look forward to strengthening our international collaboration in faculty and research collaboration with OMPU in the near future.

Warm regards,



Shih-Bin Fang, MD, PhD

Associate Chair in International Affairs,
Associate Professor of Pediatrics,
School of Medicine, College of Medicine,
Taipei Medical University, Taipei, Taiwan



シンガポール国立大学

When the bilateral student exchange program between Nakayama International Centre for Medical Cooperation and NUS Yong Loo Lin School of Medicine was established in 2014, we had a common objective.

Beyond the exchange of knowledge and ideas, we wanted to give students in our schools the opportunity to acquire a differentiated clinical experience by ‘walking a mile’ in each other’s shoes. Being immersed in a culture different from their own, our students would have to learn how to communicate with colleagues who may not speak their language and also look for new ways to deliver the best care to patients.

Through this program, we endeavoured to ready students from both countries to take on challenges that come their way in their journey to become doctors. The COVID-19 pandemic is one such challenge and I am certain the insights and perspectives gained by the 24 students during their exchange positively impacted their response to the ongoing pandemic in their respective countries.

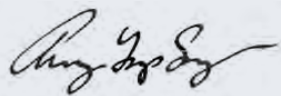
With global cooperation between learning institutions being more crucial than ever, I look forward to collaborate more deeply in the areas of Medicine, Pharmacy and Nursing under the new structure that Osaka Medical and Pharmaceutical University has put in place for international exchanges.

As countries gradually re-open their borders, I hope the students from our schools will be able to meet their future mentors and friends physically, and work together on the latest therapeutics or innovations to improve the health and lives of communities.

Together, we can inspire health for all.

Chong Yap Seng

Lien Ying Chow Professor in Medicine
Dean, NUS Yong Loo Lin School of Medicine



ソウル国立大学校

First and foremost, I would like to congratulate the merge between Osaka Medical College and Osaka University of Pharmaceutical Sciences. Since our mutual agreement in 2014, the collaboration and exchange between SNU Medicine and Osaka Medical College through the Nakayama International Center for Medical Cooperation (NICMC) has been extremely active and productive. Since its establishment in 1988 to promote international awareness in medical education, research and technology, the NICMC has continuously supported exchange of students and faculty, all over the world. Between SNU Medicine and Osaka Medical College, 14 students have participated in the exchange program from 2011 to 2019. Our students have consistently praised Osaka Medical College for providing them with the experience in Japanese medical system, medical culture, and the atmosphere of a Japanese hospital. Our students also enjoyed the opportunity to communicate with students from other countries while rotating through different departments. There is no doubt that the constructive feedback and systematic student management program of NICMC has been pivotal in maintaining a successful student exchange program and I am deeply grateful for it. Although a part of me will miss the NICMC as I remember it, I look forward to an even more active exchange between Osaka Medical and Pharmaceutical University and SNU Medicine.

Sincerely,
Jeong Eun Kim, MD
Dean & Professor in Neurosurgery
Seoul National University College of Medicine

J. E. Kim



国立台湾大学

Several weeks ago, I got an email from Director Tamaki of Nakayama International Center for Medical Cooperation (NICMC), Osaka Medical and Pharmaceutical University. She invited me to send a message, which will appear in the magazine to commemorate for the conclusion of NICMC.

This invitation reminded me a lot of memorable events that have connected National Taiwan University College of Medicine (NTUCM) and Osaka Medical College (now Osaka Medical and Pharmaceutical University) firmly. It was March 10, 2016. I got an email from Ms. Kimiko Matsumoto, when she worked for NICMC and tried to establish a mutual medical student exchange program between NTUCM and OMC. From then on, we really have kept an excellent rapport and actually set up many exchange programs. The faculty members and students from both institutes visited each other regularly. In the April of 2019, I myself did fly to Osaka and delivered a talk and enjoyed the authentic Japanese “omotenashi” (おもてなし) so much. I met my old friends, Prof Tamai, Prof Ueno, and Prof Takitani there. In the meantime, I made many new friends, including the President Otsuki and all the staff. Although my Japanese proficiency is awkward, I could heartily feel that we would understand each other well. Later on, with the help of Dr. Megumi Kondo, our staff and students joined the sakura science(さくらサイエンス) program and learned a lot in their trip to OMC and NICMC. We really felt your warm hospitality and kindness whenever we visited your institute.

NICMC will no longer exist after April 2022. However, it will be transformed into a new International Exchange Division of Osaka Medical and Pharmaceutical University, which I believe will be even more effective in facilitating the international collaboration. On behalf of NTUCM, I sincerely congratulate the conclusion of NICMC for its successful accomplishments. The intimate relationship and close ties between our institutes certainly will last forever.

National Taiwan University
College of Medicine
Dean Yen-Hsuan Ni

Yen-Hsuan Ni



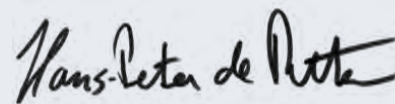
ミネソタ州立大学 マンケート校

It is a great pleasure to congratulate you on the launching of your new the Global Center that evolved from the Nakayama International Center for Medical Cooperation. As a multi-disciplinary health sciences-oriented university, you are well positioned to face the many opportunities and challenges in healthcare within an emerging global society.

The partnership in nursing between originally Osaka Medical College and now Osaka Medical and Pharmaceutical University was started in 2019. Since than this parentship has led to a fruitful collaboration. The nursing profession is the largest profession not only in our respective countries but also globally. Even though the nursing profession is often not associated with medical and pharmaceutical breakthroughs, it can be considered the backbone of many national health systems. The famous Minnesotan Physician Dr. Charles E. Mayo stated, "The trained nurse has given nursing the human, or shall we say the divine touch, and made the hospital desirable for patients with serious ailments regardless of their home advantages." It has been an honor and pleasure to focus our collaboration between our universities on nursing practice education, research, and collaboration. The recent pandemic has shown us how small and connected the world has become, and the importance of sharing our experience and knowledge to improve healthcare. In addition, it has been inspirational to see how we have moved out of our comfort zones, linguistically and culturally, to focus on new ways of improving the healthcare delivery to patients both in Japan and the United States.

The birth of Osaka Medical and Pharmaceutical University by merging two respected institutions of higher learning and the resulting opening of your new Global Center can be seen as a symbol of how we thrive by collaborating and working in an interdisciplinary fashion. We look forward to many years of fruitful partnership with your newly combined university. Many congratulations!

Respectfully yours,



Hans-Peter de Ruiter RN, PhD
Professor and Director of the Glen Taylor Insitute
Minnesota State University
Mankato, USA



北京大学附属深圳病院

hospital which integrates medical treatment, teaching, scientific research and prevention. The hospital was funded in 1999 and covers an area of 59,000 square meters, 1,765 beds and 3,339 employees.

The hospital established exchanges and cooperation with Peking University and Hong Kong University of Science and Technology.

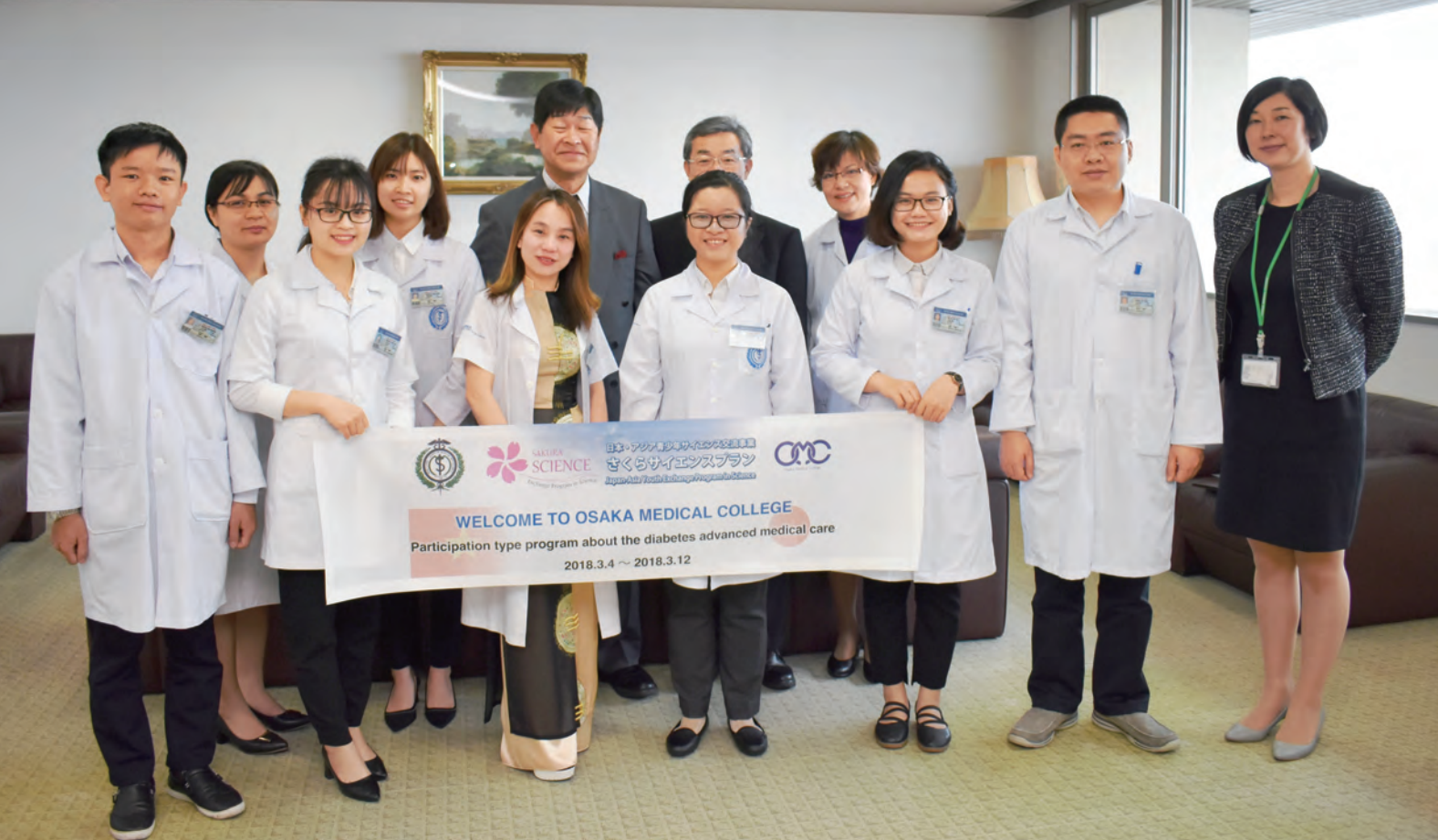
"Benevolence, Superb Skills, Erudition, Fraternity" is the philosophy of Peking University Shenzhen Hospital. Accompanied by this mission and responsibility, the young Peking University Shenzhen Hospital will continue to move forward persistently and steadily on the road of "sharing medical achievements and living a healthy life together".

Peking University Shenzhen Hospital and Osaka Medical College of Medicine have agreement on Bilateral cooperation in September 2019.

We have acted activities in the field of research: such as exchange of prefessors and researchers, exchange of information and publications for research purposes and other activities. We hope we would have further connection in the future.

President
Chen Yun





沿革／中山国際医学医療交流センターの歩み

1927





【治 革】

1998年	●	中山国際医学医療交流センター開設 JICA(国際協力事業団)を通じて海外研究者、医療従事者の本学での研修を開始
2002年	●	アムール医科アカデミーと交流協定締結
2003年	●	医学部留学生受け入れプログラム開始
2004年	●	日中友好病院と交流協定締結
2005年	●	医学部生海外派遣プログラム開始
2006年	●	ハワイ大学医学部と交流協定締結 ハワイ大学医学部医学教育センターと交流協定締結
2007年	●	タンベレ大学と交流協定締結
2008年	●	中国医科大学と交流協定締結 中国医科大学国際交流処と交流協定締結 マヒドン大学医学部シリラート病院と交流協定締結 秀傳記念醫院と交流協定締結
2009年	●	看護学部開設 カトリック大学校医学部と交流協定締結
2011年	●	台北医学大学と交流協定締結
2013年	●	シンガポール国立大学医学部と交流協定締結 看護学部生海外派遣プログラム開始 看護学部留学生受け入れプログラム開始
2014年	●	ソウル国立大学校医学部と交流協定締結
2016年	●	国立台湾大学医学部と交流協定締結 ベトナム国家大学(ハノイ校)医薬学部と交流協定締結 バクマイ病院と交流協定締結
2019年	●	ミネソタ州立大学マンケート校と交流協定締結 北京大学附属深圳病院と交流協定締結 国立台湾大学医学部と単位互換協定締結
2021年	●	大阪医科薬科大学誕生
2022年	●	中山国際医学医療交流センター閉設 国際交流機構設置
2023年	●	国際交流センター(Global Center)開設

中山国際医学医療交流センターの歩み

中山国際医学医療交流センター(Nakayama International Center for Medical Cooperation)は、医学・医療両面での国際的な学術交流、援助、更には教育、研究の振興に寄与することを目的とし、1998年1月16日に開設された。本学法人の目的に記されているように、本学の前身大阪高等医療専門学校はいかなる地域においても良質な医療を提供できる医師を養成するために設立された。時を経た今もダイバーシティを尊重、広く医学・医療の場で世界をけん引しつつ、地域で活躍する人材を養成することが本学の使命となったが、本学の国際交流が東南アジア、東アジアを起点に展開されてきたことは開学当時の建学の精神を強く反映するものであるといえる。

名称に「中山」とあるのは、本学卒業生である中山太郎博士(元衆議院議員)を顕彰するものである。博士には長年にわたり外務大臣として活躍され、本学においては国際交流部署設置前から国際交流活動に様々な形でご指導ご支援を頂いてきたことから、学校法人は中山太郎博士を会長、初代センター長として大澤仲昭教授(現名誉教授)を迎え、センターを設置した。センター開設当初は、JICA(国際交流事業団)の協力のもと、タイやフィリピンとのエイズ対策プロジェクトや日中友好病院での研修など、当時の医療後発国への貢献を中心とし、本センターの役割をスタートさせた。

本センターは研究者や医療者の交流をその出発点としていたが、2002年にアムール医科アカデミー(ロシア)との学術交流協定を締結したことを皮切りに、2005年には医学部生海外派遣プログラムを開始し、学部学生の国際交流の基点としての役割が当センターに加わった。医学部6年生の臨床実習における1ヵ月の交換留学や短期研修などでこれまでに274名の医学部生、21名の看護学部生の海外派遣を支援してきた。また、留学生受入れも本センターを窓口とし、積極的に行ってきた。医学部の留学生クリニカル・エレクトィブでは交流協定校を中心に194名、短期研修では27名、看護学部では短期プログラムで43名の留学生を受け入れてきた。このような本学の学部学生の活発な国際交流は学外からも高く評価されてきた。学部学生の国際交流を本学国際交流のオリジナリティとして強く打ち出してくることができたのは、教職員の皆様のご理解ご支援あつてのことと、ここに改めて感謝の意を表したい。

国際交流が大きな転換期を迎えたのは2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の世界的な流行である。対面での国際交流が3年弱も中止を余儀なくされる中で、国際交流の意義や質、その方法が問われることとなった。当センターでは、2020年中にオンラインでの国際シンポジウムや医学部での短期プログラム、看護学部オンラインモジュール科目への参加等、国際交流の場を提供し、学生の国際交流の志を支え続けてきた。

2021年4月に大阪医科大学と大阪薬科大学が統合し、医療系総合大学としての特色を活かした国際交流を推進すべく、この度、当センターを発展的に解消し、国際交流機構を開設したが、ロシアのウクライナ侵攻に端を発して不安定となった国際情勢に鑑み、安全確保体制を強化すべく、新たに国際交流センター(Global Center)を設置する運びとなった。本学の使命である国際貢献、グローバル人材育成を担ってきた当センターをご支援頂いた教職員の皆様に深謝申し上げる。



初代会長 中山太郎博士

【第3章】

Chapter-3

大阪医科大学 中山国際医学医療交流センター

交流の集積

1927



【協定締結】

大学間協定

締結年度	国・地域	大学・部局(機関)名
2002	ロシア	アムール医科アカデミー
2007	フィンランド	タンペレ大学
2008	中国	中国医科大学
2011	台湾	台北医学大学
2016	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校医薬学部
2019	アメリカ合衆国	ミネソタ州立大学マンケート校

大学一施設間協定

締結年度	国・地域	大学・部局(機関)名
2004	中国	日中友好病院
2008	台湾	秀傳紀念醫院
2016	ベトナム	バクマイ病院
2019	中国	北京大学附属深圳病院

部局間協定

締結年度	国・地域	大学・部局(機関)名
2006	アメリカ合衆国	ハワイ大学医学部
		ハワイ大学医学部医学教育センター
2008	中国	中国医科大学国際交流処
	タイ	マヒドン大学医学部シリラート病院
2009	大韓民国	カトリック大学校
2013	シンガポール	シンガポール国立大学医学部
2014	大韓民国	ソウル国立大学校医学部
2016	台湾	国立台湾大学医学部

【学部学生派遣】

医学部 短期研修

派遣年度	国・地域	相手校	派遣人数
2006	ロシア	アムール医科アカデミー	5
2008	ロシア	アムール医科アカデミー	6
	米国	ウエストバージニア大学病院	2
2010	米国	ウィスコンシン大学	2
	ロシア	アムール医科アカデミー	4
2011	中国	中国医科大学	5
2012	ロシア	アムール医科アカデミー	3
2014	ロシア	アムール医科アカデミー	3
2015	タイ	マヒドン大学熱帯医学研究所	4
	韓国	カトリック大学校	1
2016	英国	グラスゴー大学医学部	1
	英国	グラスゴー大学医学部	1
2017	タイ	マヒドン大学シリラート病院	1
2018	英国	オックスフォード大学医学部	1

医学部 ハワイ大学ワークショップ

派遣年度	国・地域	相手校	参加人数
2006	米国	ハワイ大学	3
2007	米国	ハワイ大学	3
2009	米国	ハワイ大学	10
2010	米国	ハワイ大学	6
2012	米国	ハワイ大学	7
2015	米国	ハワイ大学	12
2016	米国	ハワイ大学	14
2017	米国	ハワイ大学	9
2018	米国	ハワイ大学	8
2019	米国	ハワイ大学	6

医学部派遣その他プログラム

スタンフォードVIA

派遣年度	参加人数
2013	4
2014	2
2015	4
2016	4
2017	4
2018	2
2019	3

SIMPIC

(国際微生物学・免疫学コンペティション)

派遣年度	派遣人数
2011	4
2014	4
2015	10
2016	15
2017	11
2018	4

看護学部 短期派遣プログラム

ミネソタ州立大学マンケート校

派遣年度	派遣人数
2019	3

台北医学大学

派遣年度	派遣人数
2013	6
2014	5
2015	1
2016	4
2018	2

医学部 海外臨床実習(単位互換・単位認定)

派遣年度	国・地域	派遣先	派遣人数
2008	米国	ハワイ大学	3
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
2009	米国	ハワイ大学	1
2010	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
	米国	ハワイ大学	2
	中国	中国医科大学	1
2011	韓国	カトリック大学校	4
	米国	ハワイ大学	1
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
2012	韓国	カトリック大学校	4
	米国	ハワイ大学	2
2013	中国	中国医科大学	3
	台湾	台北医学大学	8
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
	米国	ハワイ大学	1
	韓国	カトリック大学校	7
2014	タイ	マヒドン大学シリラート病院	4
2015	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
	台湾	台北医学大学	3
	米国	ハワイ大学	1
2016	台湾	台北医学大学	2
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	1
	シンガポール	シンガポール国立大学	1
	韓国	ソウル国立大学校	1
	米国	ハワイ大学	3
2017	韓国	カトリック大学校	2
	台湾	国立台湾大学	3
	シンガポール	シンガポール国立大学	1
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	2
2018	シンガポール	シンガポール国立大学	2
	台湾	国立台湾大学	1
	シンガポール	シンガポール国立大学	2
2019	韓国	ソウル国立大学校	1
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	1
	韓国	カトリック大学校	1
	台湾	国立台湾大学	2

【学部学生受入れ】

医学部 留学生受入れ

協定校 クリニカル・エレクトィブ(単位互換・認定)

受入れ年度	国・地域	相手校	受入れ人数
2006	米国	ハワイ大学	3
2007	ロシア	アムール医科アカデミー	7
	米国	ハワイ大学	3
2008	米国	ハワイ大学	3
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	2
	シンガポール	シンガポール国立大学	2
2009	米国	ハワイ大学	3
	ロシア	アムール医科アカデミー	4
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
	中国	中国医科大学	2
2010	韓国	カトリック大学校	8
	米国	ハワイ大学	4
	中国	中国医科大学	2
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
2011	米国	ハワイ大学	3
	中国	中国医科大学	2
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
	韓国	カトリック大学校	3
2012	米国	ハワイ大学	4
	台湾	台北医学大学	4
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	3
	中国	中国医科大学	5
2013	韓国	カトリック大学校	4
	米国	ハワイ大学	4
	ロシア	アムール医科アカデミー	3
	台湾	台北医学大学	3
2014	中国	中国医科大学	2
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	4
	韓国	カトリック大学校	4
	台湾	台北医学大学	4
2015	韓国	カトリック大学校	4
	タイ	マヒドン大学シリラート病院	2
	シンガポール	シンガポール国立大学	2
	ロシア	アムール医科アカデミー	2
2016	米国	ハワイ大学	4
	台湾	台北医学大学	4
	韓国	カトリック大学校	2
	中国	中国医科大学	2
2017	タイ	マヒドン大学シリラート病院	2
	台湾	国立台湾大学	2
	韓国	ソウル国立大学校	3
	米国	ハワイ大学	4
2018	ロシア	アムール医科アカデミー	1
	韓国	カトリック大学校	2
	台湾	国立台湾大学	1
	シンガポール	シンガポール国立大学	2
2019	タイ	マヒドン大学シリラート病院	2
	台湾	国立台湾大学	1
	韓国	カトリック大学校	2
	米国	ハワイ大学	1

協定校 短期プログラム

受入れ年度	国・地域	相手校	受入れ人数
2014	タイ	マヒドン大学	2
2014	タイ	マヒドン大学	2
2015	米国	スタンフォード大学	1
2015	英国	ロンドン大学	1
2015	米国	スタンフォード大学	1

協定校 その他プログラム (JST さくらサイエンスプラン)

受入れ年度	国・地域	相手校	受入れ人数
2017	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校	学生6、教員2
2018	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校	学生6、教員2
2019	台湾	国立台湾大学	院生5、教員1

協定校外 クリニカル・エレクトィブ

受入れ年度	国・地域	相手校	受入れ人数
2008	英国	リバプール大学	4
2009	オーストラリア	オーストラリア国立大学	1
2010	カナダ	マックマスター大学	1
2010	オーストラリア	オーストラリア国立大学	1
2016	ドイツ	ルートヴィヒ・マクシミリアン大学	1
2018	ドイツ	ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学	1
2019	ドイツ	ルートヴィヒ・マクシミリアン大学	1

協定校外 短期研修

受入れ年度	国・地域	相手校	受入れ人数
2008	韓国	全北大学校	5
2008	中国	精華大学	2
2008	英国	ブリストル大学	1

協定校外 長期研修(外国人委託学生)

受入れ年度	国・地域	相手校	受入れ人数
2016	ドイツ	ルートヴィヒ・マクシミリアン大学	1

看護学部 受入れ

協定校 短期プログラム

受入れ年度	国・地域	相手校	受入れ人数
2013	台湾	台北医学大学看護学部	9
2014	台湾	台北医学大学看護学部	5
2017	台湾	台北医学大学看護学部	9
2018	台湾	台北医学大学看護学部	10
2019	台湾	台北医学大学看護学部	10

【海外訪問・本学訪問】

海外大学・施設への訪問

訪問年度	国・地域	相手校・機関
2000	中国	日中友好病院
	ロシア	アムール医科アカデミー
2002	ロシア	アムール医科アカデミー
	中国	日中友好病院
2003	中国	日中友好病院
2004	ロシア	アムール医科アカデミー
	中国	日中友好病院
		浦南医院及び関連病院
2007	フィンランド	タンペレ大学
2009	タイ	マヒドン大学シリラート病院
2010	中国	中国医科大学、黒龍江中医薬大学

海外大学・施設からの本学訪問

訪問年度	国・地域	相手校・機関
1997	ジョージア	トビリシ医科大学
1999	中国	日中友好病院
2001	韓国	高麗大学
	ロシア	アムール医科アカデミー
2003	ロシア	アムール医科アカデミー
2004	中国	日中友好病院
2005	ロシア	アムール医科アカデミー
2006	米国	デューク大学
	中国	上海市第六人民医院
2007	米国	ミズーリ大学・コロンビア校
		カリフォルニア大学
		デラウェア大学
	中国	江蘇省医学会
		上海市浦東新区衛生局
		中国医科大学
	台湾	Tai Xing Clinic
	タイ	秀傳紀念醫院
2008	モンゴル	Second General Hospital
	英国	ダンディー大学
	米国	トーマスジェファーソン大学救急医療部
		ウィスコンシン大学
	中国	大連経済技術開発区医院
		ハルビン医科大学第一附属臨床医学院
	サウジアラビア	タイバー大学
	タイ	マヒドン大学医学部シリラート病院
2009	米国	ハワイ大学シムティキシミュレーションセンター
		ハワイ大学シムティキシミュレーションセンター
		ハーバード大学公衆衛生大学院
		スタンフォード大学
		ハワイ大学
	タイ	王立ナラティワート大学
	韓国	カトリック大学校

訪問年度	国・地域	相手校・機関
2011	韓国	カトリック大学校医学部
2014	韓国	ソウル国立大学校医学部
2016	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校/バクマイ病院
2017	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校/バクマイ病院
2018	タイ	マヒドン大学医学部シリラート病院
	台湾	国立台湾大学
	ドイツ	ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学 シャリテ・ベルリン医科大学
2019	中国	北京大学附属深圳病院
	韓国	ソウル国立大学校医学部

訪問年度	国・地域	相手校・機関
2010	英国	グラスゴー大学
	米国	メイヨークリニック
	タイ	タイ厚生省子ども発達センター
	韓国	ソウル国立大学校医学部
2011	台湾	アジア精神保健協会
	米国	ハワイ大学医学部
	カナダ	ブリティッシュコロンビア大学
	韓国	ソウル国立大学校医学部
2012	台湾	台北医学大学
	英国	グラスゴー大学
	米国	ハワイ大学
2013	タイ	マヒドン大学シリラート病院
	中国	マヒドン大学ラマティボディ病院
		台北医学大学
		日中友好病院
2014	韓国	カトリック大学校
	台湾	ソウル国立大学校医学部
	台湾	台北医学大学看護学部
2015	ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校
	米国	スタンフォード大学
	中国	山西医科大学看護学部
2016	タイ	マヒドン大学ラマティボディ病院
	マレーシア	マラヤ大学
	ドイツ	ライプツィヒ大学
2017	米国	カリフォルニア大学サンフランシスコ校
	シンガポール	シンガポール国立大学
2018	スウェーデン	カロリンスカ大学病院
	ドイツ	ミュンスター大学附属病院
2019	韓国	カトリック大学校附属ソウル聖母病院
	米国	ハワイ大学医学部
2019	台湾	ミネソタ州立大学マンケート校
	台湾	国立台湾大学医学部

【国際交流シンポジウム】

開催年度	国際交流シンポジウム題名
2000	第1回国際交流シンポジウム「21世紀に向けた大阪医科大学の国際交流」
2001	第2回国際交流シンポジウム「ISDN回線を利用したテレ・カンファレンス～日本・フランス・中国～」
2002	第3回国際交流シンポジウム 「Think globally and Act Locally for Total Environment from Takatuki」 (第10回国際環境複合影響会議シンポジウム)
2002	第4回国際交流シンポジウム「大阪医科大学の国際交流のあらたなる展開」
2005	第5回国際交流シンポジウム「それぞれの国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう1」
2006	第6回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう2」
2007	第7回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう3」
2008	第8回国際交流シンポジウム「それぞれの国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう4」
2009	第9回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう5」
2009	第10回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう6」
2010	第11回国際交流シンポジウム「それぞれの国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう7」
2012	第12回国際交流シンポジウム「それぞれの国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう8」 (教育センターレクチャーシリーズ17「韓国と日本の先進的医学教育の現状」)
2013	第13回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう9」
2014	第14回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう10」
2015	第15回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう11」
2016	第16回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう12」
2017	第17回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう13」
2018	第18回国際交流シンポジウム「各国の医学教育・スクールライフ・文化を学ぼう14」→ 中止(豪雨のため休校)
2019	第19回国際交流シンポジウム「アジアにおける医学教育と研究の展開」(第77回医学教育ワークショップ)
2020	第20回国際交流シンポジウム「西太平洋地域のCOVID-19の状況とWHOの対応」
2021	第21回国際交流シンポジウム「医学部における医療倫理学教育」(第91回医学教育ワークショップ)
2022	第22回国際交流シンポジウム「Inter-professional ethics education」(第107回医学教育ワークショップ)

【国際交流講演会・ワークショップ／オンライン交流】

国際交流講演会・ワークショップ

開催年度	講演会題名・内容
2003	「腫瘍診断と治療についての我々の応用基礎研究」
2004	「中国の病院改革について」
2006	「Neurosurgeon in the Management of Brain diseases -21世紀の脳神経外科-」
2007	「PBLチュートリアル教育ことに少人数の教員による手法」
2008	「マーストリヒト大学スキルスラボにおけるスキルトレーニングー30年の活動」
	「JABSOMの周到な教育」(教育センターレクチャーシリーズ5)
	「ダンディ大学の医学教育」
2009	「Enhancing the Effectiveness of Problem-Based Learning(PBL)ー問題解決型学習(PBL)の効果を高める方法ー」(ハワイ大学医学部ワークショップ in 関西)
	「臨床教育改善のための方策」スタンフォード大学医学部Faculty Development Centerワークショップ(教育センター共催)
	「“ハワイ型”問題解決型学習(PBL)」デモンストレーション」(ハワイ大学医学部医学教育・本学教育センター共催)
2010	「PBLチュートリアル教育を考える:多様な展開と将来への展望」(教育センターレクチャーシリーズ12)
	「1. Curriculum Design in CMC - Process and Outcome、2. How to Teach Clinical Skills for Medical Students?」(教育センターレクチャーシリーズ13)
	「タイ王国の発達障害の現状について」
2011	「Mini-Cex and Portfolios. Developing Staff to assess students: The Glasgow Way.」(教育センターレクチャーシリーズ15)
	「神経病理・解剖(Neuropathology)からみたレジデントの教育についてーMAYO CLINICの経験からー」(教育センターレクチャーシリーズ16)
	「Teaching Communication Skills by Means of Patient Presentations」(教育センターレクチャーシリーズ17)
	「韓国と日本の先進的医学教育の現状」(教育センターレクチャーシリーズ18)
2013	「Towards global standards for Medical Education. A view from Europe.」(教育センターレクチャーシリーズ24)
	「異文化理解と治療」(看護学部 第2回国際シンポジウム)
2014	「本学の医学教育について」日韓合同医学教育コンベンション
2017	「日本開国 医学教育変革、グローバル化と未来」
2019	「医学部における国際バカロレア入試の活用」(FD・SD講演会/第80回医学教育ワークショップ)
	「教育の国際化～海外学生の求めるクリ・クラ参加～」(第9回FD&SD「教育・研究集会」)
2022	「MSUM Online International Seminar for OMPU」

オンライン交流

開催年度	タイトル
2007	ASMA16-th Student Scientific Conference on Foreign Languages with International Participation (ロシア・アムール医科アカデミー学生科学カンファレンス)Skype参加
2008	18th Scientific Student's Conference in Foreign Languages(ロシア・アムール医科アカデミー学生科学カンファレンス)DVD参加
2009	19th Scientific Student's Conference in Foreign Languages(ロシア・アムール医科アカデミーカンファレンス)DVD参加
2010	20th Scientific Student's Conference in Foreign Languages(ロシア・アムール医科アカデミー学生科学カンファレンス)DVD参加
2011	21th Scientific Student's Conference in Foreign Languages(ロシア・アムール医科アカデミー学生科学カンファレンス)DVD参加
2012	22nd Scientific Student's Conference in Foreign Languages(ロシア・アムール医科アカデミー学生科学カンファレンス)DVD参加
2013	23rd Scientific Student's Conference in Foreign Languages(ロシア・アムール医科アカデミー学生科学カンファレンス)DVD参加
2014	24rd Scientific Student's Conference in Foreign Languages(ロシア・アムール医科アカデミー学生科学カンファレンス)DVD参加
2021	Webinar for Medical Education during COVID-19「本学発表:新型コロナ流行期における早期体験実習プログラム」
	Web International Module :Experiential International Module
2022	Web International Module :Experiential International Module

【外部資金獲得】

獲得年度	資金名
2011	JASSO(日本学生支援機構):留学生支援制度(ショートステイ・ショートビジット)
2012	JASSO(日本学生支援機構):留学生支援制度(ショートステイ・ショートビジット)
2013	JASSO(日本学生支援機構):留学生交流支援制度(短期受入れ)
2014	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(短期受入れ)
2015	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)
2016	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)
2017	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)
	JSTさくらサイエンスプラン:「糖尿病最先端医療に関する参加型プログラム」(ベトナム国家大学ハノイ校)
2018	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)
	JSTさくらサイエンスプラン:「糖尿病合併症抑制と口腔ケアプログラム」(ベトナム国家大学ハノイ校)
2019	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)
	JSTさくらサイエンスプラン:「アジア高齢者社会における口腔内細菌叢ゲノム解析と循環器疾患予防プログラム」(国立台湾大学)
2020	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)
	JSTさくらサイエンスプラン:「ゲノム解析と疾患予防プログラム」(国立台湾大学)
2021	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)
2022	JASSO(日本学生支援機構):海外留学支援制度(協定受入れ)

【会長／歴代センター長／歴代副センター長】

会 長

氏 名	所 属(在位時)	職 位(在位時)	在位期間
中山 太郎	本学卒業生 1952 (S27)年卒業	外務大臣等	1998年1月16日～2010年3月31日

歴代センター長

氏 名	所 属(在位時)	職 位(在位時)	在位期間
大澤 仲昭	第1内科学	教授	1998年1月16日～1999年3月31日
山本 隆一	病院医療情報部	助教授	1999年4月1日～2000年5月31日
河野 公一	衛生学・公衆衛生学「Ⅰ・Ⅱ」	教授	2000年6月1日～2012年8月31日
花房 俊昭	第1内科学	教授	2012年9月1日～2016年3月31日
米田 博	神経精神医学	教授	2016年4月1日～2018年3月31日
植野 高章	口腔外科学	教授	2018年4月1日～2020年3月31日
近藤 洋一	解剖学	教授	2020年4月1日～2021年8月31日
玉置 淳子	衛生学・公衆衛生学「Ⅰ・Ⅱ」	教授	2021年9月1日～2022年3月31日

歴代副センター長 (2019年度より配属)

氏 名	所 属(在位時)	職 位(在位時)	在位期間
近藤 洋一	解剖学	教授	2019年7月1日～2020年3月31日
近藤 恵	中山国際医学医療交流センター	講師	2019年7月1日～2022年3月31日

編集後記

大阪医科大学中山国際医学医療交流センターは2022年3月31日をもって発展的に解消いたしました。本センターは元外務大臣中山太郎先生(元法人理事・高21期生)の提唱により1998年1月に設立され、建学の精神に則り、医学医療の面で国際的に寄与して参りました。この度、発展的解消するにあたり、24年あまりの歩みを一つの記念誌にまとめて発刊いたします。

本センター開設当初は、当時の医療発展途上国への援助を中心に活動を行っていましたが、その後、共同研究や学部学生との交流といった次世代グローバル人材育成へとその役割を拡げて参りました。長年の活動の中で13の大学、4の医療施設と交流協定を結び、教育、研究で活発な国際交流を行ってきました。様々なプログラムを展開する中で、300名弱の学部学生を海外に派遣し、300名程の海外学部学生を受入れ、本学の国際的な学びの場として大きく貢献して参りました。このように活発な国際交流を行えてきましたのも歴代センター長、センター構成員の熱意だけでなく、教職員の皆さまのご理解、ご支援の賜物と深く感謝申し上げます。本センターを通じて海外研修に参加された卒業生の皆さまが、世界に貢献する医療人の基礎を培い、様々な形でグローバル社会に貢献してくれているものと確信しております。

中山国際医学医療交流センターはその役目を終えます。本学の国際交流担当部署は国際交流機構を経て、2023年1月より国際交流センター(Global Center)に引き継がれます。2020年初頭からの新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大、世界情勢の変化等、国際交流はそのあり方を大きく問われています。新たに本学の国際交流を担う国際交流センターが、本学の建学の精神、中山国際医学医療交流センター設立時からの使命を基に、世界に貢献できるグローバル人材育成の拠点を担ってくれることを祈念し、本誌を閉じることといたします。教職員をはじめ、今日まで当センターを支えて下さった皆さまに厚く御礼申し上げますと共に、新しく設立される大阪医科薬科大学国際交流センターにも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、佐野浩一学長に監修をお願いいたしました。ご寄稿頂きました皆さま、資料をご提供頂きました企画・広報課、そして、広済堂の皆さまに感謝申し上げます。

2023年3月30日

大阪医科大学中山国際医学医療交流センター
センター長：玉置 淳子
副センター長：近藤 洋一
副センター長：近藤 恵

大阪医科薬科大学中山国際医学医療交流センター 閉設記念誌
中山国際医学医療交流センターの航跡
2023年3月30日発行

編集発行 大阪医科大学中山国際医学医療交流センター
大阪府高槻市大学町2番7号

印刷・製本 株式会社広済堂ネクスト
大阪府大阪市中央区高麗橋4-1-1 興銀ビル2階



Nakayama International Center for Medical Cooperation
OSAKA MEDICAL COLLEGE

大阪医科大学 中山国際医学医療交流センター

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7